

学校とミュージアム

「コレジオ・アイエレン」設計=エレメンタル

コミュニティ・センターとしての学校 マルコ・ピアージ

参照 | 本誌 pp.4-17

学校建築が建築における最も高貴なテーマのひとつであることは確かだ。学びのための施設であるだけでなく、社会的共生のさまざまな決まり事を伝授する場でもある。半分は機能的設備によって、また半分は都市のモニュメントとして、常にそれを生み出した思想や教育理念を映し出す。19世紀後半と20世紀は、まず折衷主義の文化によって、続いて近代建築運動によって、学校建築の「タイポロジー」的で「代表的」な性質が以前にも増して探求され、実験された世紀である。この時代において、大衆の教育は放棄することのできない権利となり、個人の社会参加と国家の経済成長のための競争戦略となった。

今日、西洋と先進諸国はおもに、すでに老朽化し時には古めかしくなった学校建築遺産の刷新や再生という問題に直面している。他方で、新しい学校の建設への将来的投資に向かっているのは、特に発展途上にある新興諸国あるいは第三世界である。まさにそのケースに当たるのが、チリのサンティアゴから90km南下したランカグアの町に、建築家グループのエレメンタルが近年実現したコレジオ・アイエレンである。これは民間のイニシアチブで始まった社会事業で、インプルサ教育財団——2012年にパブロ・イバニェスが妻のコンスタンサ・グラエルと設立し



北側上空より見る



2階通路より見る



エントランス・アトリウム

たNPO団体——によって推進・出資され、農業経営者セルジオ・マッサイが支援している。事業資金の一部は国庫から助成を受け、一部は国の法律で定められた特別な税制上の優遇措置を用いて集められた寄付金で賄われた。事業の目標は、プロジェクトの対象地区に多く住む低所得者世帯の子供にも、質の高い教育サービスに無償でアクセスする権利を保障することである。チリでは、公立学校に投じられる公的資金が乏しく、選抜のメカニズムも細かく定められているため、富裕層だけがより良質な、概して私立の教育機関に子供たちを通わせる可能性を有し、満足のいく、あるいは少なくとも許容できるレベルの教育を受けさせることができる。

コレジオの設計に当たって、建築よりも先に、追求する目標に適した革新的教育モデルの概略が示され、そこでアメリカのKIPP(知識は力だプログラム)が参照源に選ばれた。これは特に生徒の人格形成に狙いを定めたプログラムで、社会的弱者世帯で生まれ育った子供たちを抽選で選び、彼らのなかの自尊心、自制心、横断的能力の

強化増進を重視する。

エレメンタルは、2001年にアレハンドロ・アラヴェナが設立した建築設計事務所である。公共の社会福祉建築のなかでも特に住宅建築の領域において、チリ民衆の生活条件を向上させるために働くという明確な使命を掲げている。今回エレメンタルに委ねられたのは、想定された教育活動の適切な実施に見合うと同時に、この新しい教育機関を形づくるアイデンティティと多様な共同体的価値を伝達する力をもつ複合的空間を設計することだった。

現在の学校設計に普及した方向性に従いつつ、立地地域における公共サービスの恒常的な不足に対処するため、コレジオの建物は統一的イメージと、放課後に地域と地元住民の生活に開かれた小さなコミュニティ・センターとして機能できるように分節化とを両立させている。

建物は、食堂や体育館など集団活動に充てられる、特に背の高い2層吹き抜けの空間が、学校が閉じている時間帯にも容易にアクセスできるよう道路側のファサード沿いに並ぶかたちで構成されている。またエントランスの



南側エントランス



左に教室棟、右に中庭を見る

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2020Arnoldo Mondadori Editore
©2020Architects Studio Japan

「カスラーノの中学校」設計=アドルフォ・ザネッティ

共同体に奉仕する学校 マルコム・ラッツァーニ

参照 | 本誌 pp.26-35

パドヴァ近郊のカザルセルゴの小学校（『CASABELLA』770号、2008）が本誌に掲載されてから10年余りを経て、同じ作者ガルガーノの「田舎」——ティチーノ県カスラーノ——に実現した中学校を紹介しよう。今回も、アドルフォ・ザネッティは既存のコンテキスト——称賛すべき風景に囲まれ、住宅スケールでの街の広がりの特徴とする——を解釈し、同時に市民的性質を備えたコミュニティの交流と社会化のための場を実現できる設計案によって設計競技に勝利した。

土地の性質——南方の湖に向かって傾斜する——を賢く活用することによって、持ち上げられた広場を囲む3つの建物に分けられ、屋内が明確に定義された。都市に向かう北側は、図書館とオーデトリウムのある公共的な建物に充てられた。南には教室のヴォリューム、東には体

育館が置かれた。体育館の高さは土地の高低差で和らげられ、スポーツ・エリアと結ばれる。この小さなアクロポリスは同一の基壇の上に聳えている。すべての空間が下層と連絡するが、同じように屋外に面したファサード（教室）、あるいは公共棟ではパティオ（食堂/レストラン、食事教育用の部屋）に面したファサードを備える。一方、図書館の2層吹き抜けの空間によって、中心の奥まったところにも光が届く。これら同じ建物内での、同一階および違う階どうしの機能的で可視的な連絡は、効果的で屋外空間と常に触れ合うかたちで解決された。広場からポルティコのフィルターを通して、全層吹き抜けの空洞に面したアトリウムに入る。そこはトップライトからの光で照らされ、主階段が置かれた。教室棟では、アトリウムが下層と上層の階に「継続し」、どの階でも多様な空間に分節化される。そこは生徒たちにとって交流の場にもなる。公共棟では、断面の設計によって高いところから図書館を見下ろすファサードと、上層と下層に通路が展開する眺めが可能になった。ここでは「ガラス張りの」図書館に加えて、縦の分配路が食堂/レストランのパティオから入る側面の光で照らされ、



体育館内部

教室棟の下のアトリウム、さらに建物南端の開口部からの光源まで見える。最後に、体育館のヴォリュームではエントランス・アトリウムが膨張して、プレイグラウンドに面したロジャに姿を変える。プレイグラウンドから側壁に沿って並べられたガラス壁を介して、屋外の広い眺めが得られる。

全体を3つのヴォリュームに分ける設計は、機能的思考——多様な部分を時間別に異なる方法で別個に活用する可能性——と、通路、眺望、建物間の関係や空間の分析に基づくヴォリューム群の配置に由来する。他方



全景：南側の湖に向かって見る



北側アプローチより体育館を見る



広場：左奥に公共棟、右に体育館を見る

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2020Arnoldo Mondadori Editore
©2020 Architects Studio Japan



アプローチより見る



ガラス張りの階段室



階段室



各階平面図/断面図



2階展示スペース



西側ファサード



東側ファサード



3階展示スペース

な対話となっている。それらは色彩こそ共通するが、建築的なフォルムの意味でまったく異なっている。この絶妙なバランスにこそ設計の関心が置かれているのであり、同質でないフォルムどうしを調和的に操作する力に注意が注がれている。

この博物館は約630m²と比較的小さな規模で、3層に分かれている。機能的構成は単純な2部構成とされた。ひとつのヴォリュームには垂直・水平の移動機能が充てられ、階段、エレベーター、2層および3層吹き抜けの空間が置かれる。2つめのヴォリュームは展示エリアと設備エリアに使われる。2つの建築ヴォリュームは規模と建築的特徴によって差異化される。移動のためのヴォリュームは一般的なガラス張りで垂直方向に伸びる。これに対して、2つめのヴォリュームは立方体のようなプロポーションをもち、ファサードの割り付けを見ると、水平と垂直のリ

ボン窓が広く白い壁を補うように配されている。2つの建物が接触する部分には小さなセットバックが施されて、純粋な集合的構成を活かすためのヴォリュームの自律性が強調される。はっきり見て取れるのは、初期ドイツ合理主義建築の参照、またフォルムの幾何学的で物質的な抽象化を通して建築的クオリティを打ち立てるという野心的目標である。

内部はまた別の統語法を使って設計されている。3つの部屋に分節化し3つのテーマ展示に振り分ける構成だが、側壁と天井の黒色とコントラストをなす白色の使用は連続する。その結果、記号、象徴、白いフォルムの連続が、薄暗い黒の空間に波打つ人工照明によって浮かび上がる。こうした空間によって、確実な教育普及効果をもつナラティヴの方策が作られている。

パナマの自由と人権博物館は、慣習的なフォルムを避

けて、外側の厳格なフォルムをキャノピーの力強い構造や館内の表現力溢れる展示に驚くほど調和的に結びつけた。部分どうしのバランスよい調和のコントロールにこそ、マヨル・アルケトス作品の洗練されたクオリティが宿るのである。

作品:自由と人権博物館 | 設計:イグナシオ・マヨル・タマヨ
設計チーム:Ignacio Mallol Tamayo, Juan Carlos Sáenz, Grace Attie
博物館学芸員:Heidi McKinnon | 展示構成・施工:ReHaB
施工:Constructora Ripard
建築主:Fundación Democracia y Libertad
規模:建築面積 633.95m²/屋外面積 6,603.41m²
スケジュール:設計 2016年/施工 2017-19年
所在地:Avenida Amador, Calzada de Amador,
Panama, Republic of Panama

「カソルラの病院センター」

設計=エッデア建築都市計画事務所

参照 | 本誌pp.65-72

作品:カソルラの病院センター | 設計:エッデア建築都市計画事務所
設計チーム:Ignacio Laguillo, Luis Ybarra, Harald Schönegger
現場監理:EDDEA: Eladio Suarez, Roberto Alés
設計・建設マネジメント:Miguel Sibón, Enrique Cabrera
建設マネジメント:Ignacio Olivares, Blanca Farrerons,
Javier Salvador, Jaime Fernández, Alejandro de la Torre,
Jaime García (V. Olimpia)
安全:Jesús Martínez (Prevencoor)
設計競技:José María Sánchez, Carlos Serrano
施工:Dragados: Antonio Vecino, Francisco J. Luque,
Hilario Nuñez, Carlos Cabana, Pascual Molina
建築主:Junta de Andalucía, Servicio Andaluz de Salud
工費:17,811,000.00ユーロ | 規模:建築面積 9,610m²
スケジュール:設計競技 2007年/施工 2009-18年
所在地:Road A-319 Cazorla-Peal de Becerro,
Cazorla, Jaén, Andalusia, Spain



北からの全景



屋内のパティオ



機能構成を示すダイアグラム



南西より見る



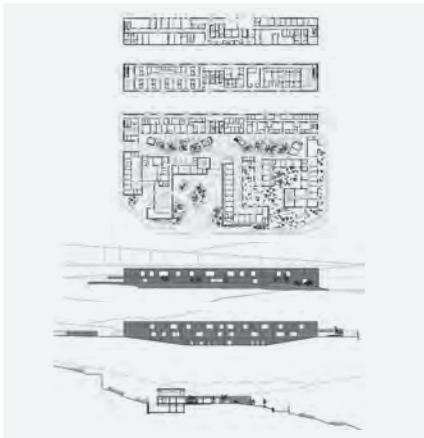
上空より見る



1階のサーキュレーション・エリア



屋外のパティオ



平面図/立面図/断面図

「サンタフェ財団病院の増築」設計=エル・エキボ・マサンティ

参照 | 本誌pp.73-79

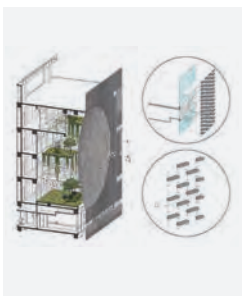
作品:サンタフェ財団病院の増築 | 設計:エル・エキボ・マサンティ
建築家:Giancarlo Mazzanti
設計チーム:Sebastián Negret, Fredy Fortich, Alberto Aranda,
Felipe Pombo, Rocío Lamprea
協働者:Ana Varona, César Grisales, Clara Vila, Daniel Cely,
Diego Casas, Dorotea Rojas, Iván Bernal,
Juan Carlos Zúñiga, Juan Sebastián Muñoz,
Juan Sebastián Tocaruncho, Lorenza Baroncelli,
Julián Gaviria, Juan Manuel Gil, Julián Otalora,
Laura Luque, Juliana Zambrano, Manuela Dangond,
Marcela Gómez, Maria Sol Echeverry, Patricia Gualteros,
Sebastián Corredor, Manuela Guzmán, Trinidad Guzmán
内装:Catalina Iannini | 構造:Nicolas Parra
ランドスケープ:Groncol | 建築主:Fundación Santa Fe de Bogotá
施工・プロジェクトマネージャー:Payc | 規模:延床面積 32,000m²
スケジュール:設計競技 2016年/施工 2016-19年
所在地:Bogotá, Colombia



全景



歩行者用通路/屋外庭園



屋内庭園の構成図



屋内庭園/トロピカル・ガーデン



エントランス・ホール



受付エリア



各階平面図/断面図

インダストリアル・デザイン：オリヴェッティ 1908 - 58

「真剣かつ上品に」セルジョ・ボラーノ

参照 | 本誌 pp.80-97

「OLIVETTI」という頭文字に凝縮される、非常に重要で複雑な、また同様に数多くの分野で非凡かつ特異に試みられた出来事については、すでに全体像が知られており、付け足すことはほとんどないとも考えることもできるだろう。しかしながら、社会・経済的、政治・文化的な側面に強く傾斜した、オリヴェッティに関する(またオリヴェッティに捧げられた)膨大な文献は、21世紀になって——特に2008年の創立100周年の波に乗って——急激に増えているが、数人の研究者が喚起したオリヴェッティの「物語」をまだ完全に統合できていないばかりか、この企業の工業製品という、もちろん副次的でない領域を詳細に検討する可能性もいまだ十分に生かされていない。現に研究文献には、じつに広範な領域にまたがるオリヴェッティ製品の完全で注釈付きの、信頼に足る批評的一覧が欠けている。エルゼリーノピオルが指摘したように、オリヴェッティ(特にアドリアーノ)について多くのことが書かれ続けているが、企業についてはほとんどない。製品の技術革新よりもデザインのほうが、生産サイクルよりも建築についてのほうが、より議論されている。だがそれらは、二度と現れ得ない前提条件の卓越した結果として、工業的にも文化的にも特別な出来事なのだ。

—

20世紀初頭、カミッロ・オリヴェッティはその企業家精神によって、イタリアでmps(「macchine per scrivere/タイプライター」の頭文字で、後に同じく「macchine da calcolo/計算機」にmdcの省略形が使われた)の生産開始に成功する。それは若かった彼が1893-94年にアメリカ旅行した成果でもある。イタリアに戻った彼は、商業・工業のさまざまな活動を経て、1908年にタイプライター製作のためにICO(Ingegner Camillo Olivetti & C./技術者カミッロ・オリヴェッティ会社)を設立する。この頭文字は会社の共通イメージと同一視されたが、高度な先端性と収益性を生み出す部門を総体的に体现するわけではなかった。生まれつき、完全な自律と高い質の生産サイクルを自らの長所とする性質だったカミッロは、その強靱な戦略に立って1908-09年に再びアメリカ合衆国に旅した。そこで、レミントンとアンダーウッドという世界最大のタイプライター製造会社も訪れている。1909年に会社の技術監督を彼の「最良の協働者」、ドメ



M 1

M 20

M 40/I

MP 1

ニコ・ブルツィオ(オリヴェッティ社のたたき上げ)に任せることによって、最初のイタリア製標準(オフィス向け)タイプライターを目指すカミッロの計画は3年後に具体化された。まさに当時の世界記録である。1910年からイヴレーアの「国内最初のタイプライター製作所」の活動は、M 1の企画に特化していく。M 1は「完全に正確な近代的加工」による「第一級の」機器で、1911年のトリノ万国博覧会に息せき切って出品された。1911年12月に、100台のタイプライターによって「われわれの予想に反して、レジア・マリナーナ[イタリア王国海軍]の重要な競技に勝利するという満足を得た」。カミッロは1932年にこう回想している。「タイプライターは、贅否ある趣味の装飾が施されたサロンのガラクタではない。真剣かつ上品な外見を持たねばならない」、とカミッロは1912年に明言した。

第一次世界大戦によってICOの活動は精緻な軍事機器の供給へと変更させられ、イヴレーアの製作所に著しい発展をもたらした。1919年に苦勞してタイプライター生産を再開したカミッロは、ブルツィオとともにM 1を改良した。その成果が1920年に導入されたM 20である。1926年に、工具や設備の製造拠点としてOMO(Officina Meccanica Olivetti/オリヴェッティ機械製作所)が操業すると、1925-26年の精力的なアメリカ旅行から戻ったばかりの化学者アドリアーノ・オリヴェッティ(カミッロを家父長とする一族の長男)が、会社経営に協力し始める。1924年に大学卒業直後のアドリアーノが工場労働者としての第一歩を踏み出した場所だ。1927年に最初の著書『L'organizzazione scientifica del lavoro(労働の科学的組織化)』を出版した後、アドリアーノは1928年に企業広報部門を始める。

1929年に開発が始まり、3つめの標準タイプライターとなるM 40の第1作が1930年に現れた。設計はジーノ・レーヴィ・マルティネーリで、カミッロが統括した。この製品は長期的な成功をはじき出した。それを支えたのが、協働会社の選択にも及ぶ明晰さを備えた巧みな広告キャンペーンだった。1930年にアルド・マニエッリに2つのデザイン課題が与えられた。ひとつはSynthesisという、オリヴェッティ社

初のカード索引機のデザインだ。これはアドリアーノが示した要求に沿った製品で、1960年代から70年代にかけて大量生産調度品の頂点を極めることになる。もうひとつは最初の携帯式タイプライター、MP 1のデザインで、モバイルではないがオフィスの外で、つまり家庭で使うよう開発された。リッカルド・レーヴィによるMP 1のための機械設計は、マニエッリが(おそらく兄弟のアルベルトの助力を得て)改良しプレス鑄造生産された簡素なボディによって具体化され、驚くほど多彩な色彩で製品化された。

1931年に「展開・広報部門」がレナート・スヴェテレミッヒ(「変わり者で、旺盛、非常に野心的」)を部長として設置され、設計者と多領域からの協働者からなるオリヴェッティ広報の恐るべきチームがかたちを取り始めた。1932年に発表されたMP 1の販売促進戦略は、シャヴィンスキーによる画期的なポスターに凝縮されている。そこにはマリア・グラッシス(オリヴェッティ社タイプライターの検査係)の物憂げな肖像が描かれ、長い手の先が真っ赤なMP 1のボディに置かれている。1935年に企業展示政策に着手する機も熟し、フィジーニ・ボッリーニのデザインしたブースがミラノ見本市に登場した。1932年に最高経営責任者に就いたアドリアーノは、1927年に始めた会社再建を完了させた。それと同時期に、ICO設立四半世紀が初めて祝われ、



MP 1:
シャヴィンスキーによるポスター、
1935

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2020 Arnoldo Mondadori Editore
©202019 Architects Studio Japan